Title	「乳児期における絵本共有が母子関係に及ぼす効果の実証的検討：子どもに対する母親の行動の変化から」（聖学院大学総合研究所（子どもの人格形成と絵本）研究プロジェクト：2013 第1回 子どもの育ちと絵本研究会）
Author(s)	石川，由美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12：22-24
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5043
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 2013　第１回　子どもの育ちと絵本研究会

「乳児期における絵本共有が母子関係に及ぼす効果の実証的検討：子どもに対する母親の行動の変化から」

聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクトは、「子どもの育ちと絵本研究会」を起動した。「こころ」は、人と人の間に生じるものである。子どもと大人が絵本を媒介とした読みあう活動を通して、お互いの「こころ」をどのように育てあうのか。そこに着目して、研究を進めている。本報告は2013年６月29日（土）聖学院大学にて行なわれた研究会の概要である。日本における発達心理学研究領域で、精力的に絵本研究を行なっている若手研究者の一人である、**京都橘大学健康科学部心理学科助教佐藤鮎美**氏をお迎えし、氏の博士論文の要となる貴重なデータに基づいた研究知見をお話いただく機会を得たのでここに報告する。

「乳児期における絵本共有が母子関係に及ぼす効果の実証的検討：子どもに対する母親の行動の変化から」

１．講演概要

佐藤氏の研究の始まりの背景には、子どもの発達に関わる要因としてのお母さん、という存在への熱いそして優しいまなざしがある。

氏は、乳児と母親の関係性を愛着の質という観点から測定するエインズワースのストレンジシチュエーション法を取り上げ､母子関係（愛着の質）に影響を与える母親の行動、それは母親の応答性にあることを説明した。その後、絵本共有場面で見られる母親の行動とは、愛着の質の高い応答性のあるものではないかというご自身の仮説を平易に語られた。佐藤氏の研究は、発達心理学的理論および実験心理学的方法を踏襲した仮説検証型のエビデンスを備えた研究となっている。

研究は、２部に分かれており、１部は母親の応答性に着目した研究で、研究１と２からなる。応答性を測る指標として氏は、次の２つの指標を用いている。１つ目は、反応時間である。反応の時間的接近の程度を、子どもの行動の生起から３秒以内に母親の応答が生じたかで符号化する。これは、母親が子どもの行動に敏感に反応していることを示す。２つ目は、子どもの感情の対処とし、母親の行動の後に子どもがネガティブな表情を表出しない場合に符号化するものであった。１部の研究は、研究１および２ともに上述の指標から符号化されたデータを用い、研究１では、絵本共有場面と自由遊び場面の比較、研究２では、絵本共有場面、自由遊び場面、おもちゃ遊び場面の比較を行なった。

その結果、絵本共有場面は自由遊び、おもちゃ遊び場面よりも子どもの感情の対処が有意に高く、また絵本共有場面は、おもちゃ遊び場面よりも反応の時間的接近が有意に高いことが明らかとなった。このことは、比較した他の場面よりも母親の応答的働きかけが絵本場面で多いことを示した。

２部の研究では、絵本共有量を増加させることによって母親の応答的働きかけが増えるのかどうかを検証する試みを行なっている。実験参加者を絵本群および統制群に分け、絵本群の母親には意識的に絵本での子どもとの共有量を増やした。また、応答性を見る指標として反応時間に加え、ス

ペックらの先行研究結果に基づき母親の賞賛と子どもの微笑みを加えた。

その結果、賞賛の頻度に絵本群、統制群の有意差はないが、子どもの微笑みの割合は、絵本群が有意に高いことが示された。この研究は、絵本共有量の増加が母親の応答的な働きかけを高める可能性を示した。また、本結果は、絵本場面での母親の応答的働きかけが愛着の質の高さに関与することを示唆したものでもあり、佐藤氏の仮説をある程度、実証したものであろう。

2．参加者からの質問について

上述の発表を受けて、参加者からは下記のような質問を受けた。

・30ヶ月児が微笑みながら母親を見ることについて、共同注意なのか、社会的規範であるのか。
・紙芝居と絵本の読み合いに違いはあるのか。
・母親の絵本の絵の読み込み方が、読み合いに与える（応答性の質に与える）影響について。
・絵本共有は、時間の共有ということであるのか。応答性の質の本質は、時間共有というところにあるのではないのか。
・家庭環境の影響はどうか。

など、参加者からの質問を受け、活発な意見交換および懇談の時間をもつことができた。

佐藤氏は、最後に絵本というツールは、子どもの発達という視点だけではなく、親自身の育ちの機会になる、親が親になるための支援をする文化的道具でもあることを語られていた。

3．まとめに代えて：応答性の界隈

絵本という文化－歴史的対象物は、めくることで、母親と子どもの間を動的に結ぶ。静的である絵本が、母子の間に置かれ、めくられた瞬間に、驚くほど動的な存在物になることは、絵本を題材に研究をする者なら周知のことである。

周知であるけれども、どうしてそうなのるのかという問には、そう容易く答えることが出来ない、深い謎を秘めた心理学的道具でもある。絵本を介して母親が子どもに働きかけるとき、例えば、絵本の中の絵の一点を子どもに見せたいと願うときには、指さしを多用し、応答性とは対極に位置づけられる指示的な行動も増える。そこには多くの声が随伴される（石川、2010）。したがって、絵本での読み合い活動で育ちを読み解くには、母親の応答性の質の高さばかりでなく、指示性の質の高さという点も抜きにはできないであろう。

しかし、絵本での母親の応答的働きかけが愛着の質を高める可能性を示唆した佐藤氏の研究知見は、良好な母子関係の親子から、母子関係が良好ではない、あるいは子どもの特性により関係性をなかなか結べない関係性の問題を抱えた子どもの問題の解決とその具体的支援を的確に導くことができる臨床場面に応用性の高い優れた知見であると思われる。

寺﨑（2013）は、7月29日の絵本研究会講演の概要で、谷川俊太郎（作）、元永定正（絵）『もこもこもこ』（文研出版 1977年）を引用して以下のように述べている。

「もこ」のことばと図は、その地（「しーん」）に潜勢している、意味とかたちになる前の、無声の間や明暗・濃淡が融合する色調にもとづいて生まれてくる。子どもと一緒に参与して、「つん」に指と声がふれて、ページをめくって「ぽろり」に指

と声がふれるとき、解けるような笑いに面白さを共有する。ことば（声）やかたち（図）の表情にふれて、その根元に潜んでいる未分化な意味やかたちを感じるとき、そのなんとなくの感触に生まれてくることばやかたちを、共に感じあう遊びになる。

応答性とは、単に子どもの反応の後の親の行動であるのだろうか。心理学的研究手法を拡張する試みをしなければ、絵本での読み合いの活動の奥深さは知り尽くせないのかもしれない。今回の参加者は、経済学の専門家である本学学長阿久戸光晴氏をはじめとして、幼稚園教諭、保育者、大学院生、教育哲学、発達心理学の研究者など多岐に渡っていた。このような多様性の中での議論は、絵本を介して垣間見られる子どもの育ちの謎を読み解く心理学的手法をさらに一歩拡張する発露となるであろう。

参考・引用文献

石川由美子（2010）絵本を介した母子活動と子どもの発達 ―「指さし」の存在的（行為的）意味：「○○は、これとこれ、ママはどれにする？」―、日本発達心理学会第21回大会論文集、pp. 428.

寺﨑恵子（2013）聖学院大学総合研究所NEWSLETTER、Vol.23、No 2 .

（文責：石川由美子［いしかわ・ゆみこ］聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授）